

曲亭馬琴「朝顔花合」報条

ここに紹介する「朝顔花合」【図版1】【図版2】【図版3】は秋水茶寮が文化十二年（一八一五）七月十九日に江戸浅草御蔵前の大円寺で開催した朝顔の展示会への参加を促す案内文である。執事として名を連ねるのは下谷の植木屋が過半であり、江戸における朝顔の流行が下谷から発祥したことを示す重要な資料である。また曲亭馬琴が秋水茶寮に代わって本文を執筆しているが、これまで、馬琴の資料としても紹介されたことがないものである。

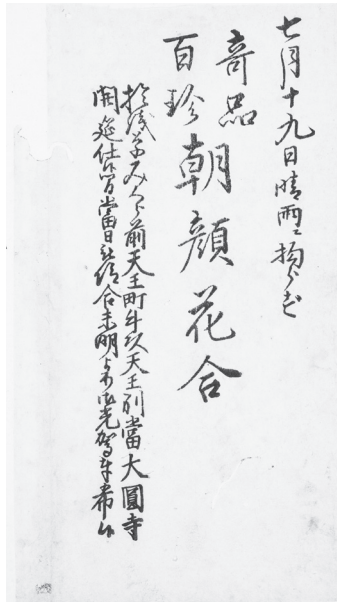
一 文化期の変化朝顔の流行について

朝顔は花や葉の形を決める遺伝子が変化しやすく、多くの変化朝顔が生まれ、その奇を競うように栽培が行なわれ

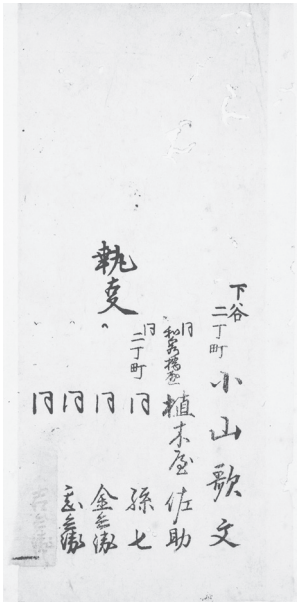
た園芸植物である。江戸における変化朝顔の流行史については既に平野恵『十九世紀日本の園芸文化―江戸と東京、植木屋の周辺―』（思文閣出版、二〇〇六年）があり、基本的な文献といえる。同書でもこの「朝顔花合」の報条については触れられておらず、同書の補訂を行なうことが可能なので、ここに紹介する次第である。

江戸における変化朝顔の流行は第一期が文化（一八〇四～一八）から文政（一八一八～三〇）にかけて、第二期が嘉永（一八四八～五五）から安政（一八五五～六〇）頃とされている。文政三年（一八二二）に刊行された曲亭馬琴「玄同放言」は元禄三年（一六九〇）跋、可休編「物見車」や元禄三年自跋、北条团水編「特牛」の記述から天和・貞享（一六八一～八八）の頃に朝顔の流行があったと論じる。

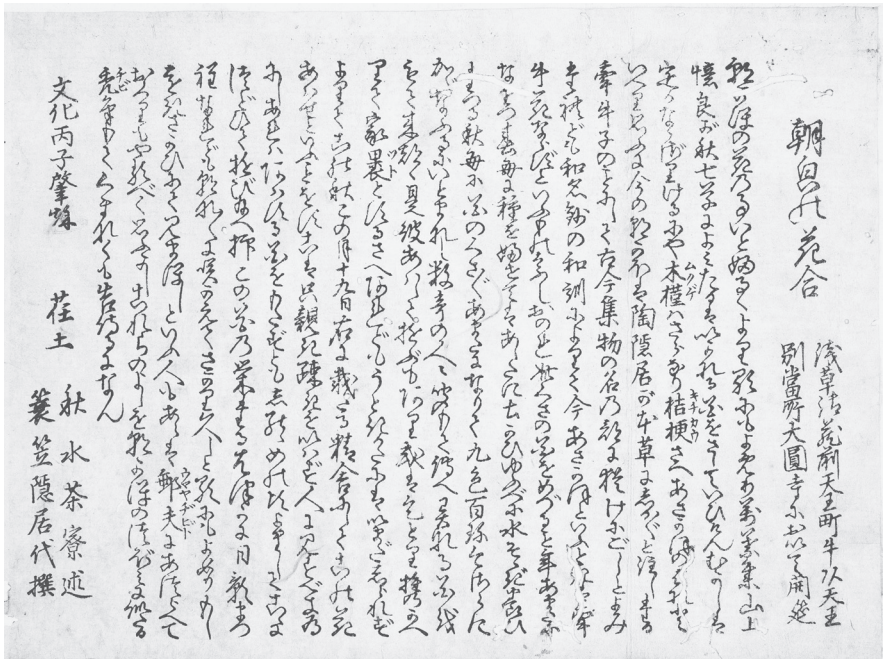
佐藤 悟



図版1 「朝顔花合」封筒表



図版2 「朝顔花合」



図版3 「朝顔花合」本紙 (架蔵)

名古屋屋においても享保八年（一七二三）に三村森軒『朝顔明鑑鈔』のような朝顔の専門書が成立する^(注1)など、朝顔は広く栽培されていた。

朝顔の流行について、文政十年に刊行された岡山鳥編『江戸名所花暦』（守不足斎蔵板）「牽牛花」の項には次のように説明する。

下谷御徒町辺 朝貌は往古より珍賞するといへとも
異花奇葉の出来たりしは 文化丙寅の災後に 下谷辺
空地の多くありけるに 植木屋朝貌を作りて 種々異
様の花をさかせたり おひくひろまり 文政はしめ
の比は下谷浅草深川編所々にても専らつくり 朝貌屋
敷など号て見物群衆せし也

「文化丙寅の災」とは文化三年三月四日に芝車町から出火し、浅草新堀まで延焼し、京橋、日本橋、神田、浅草の殆どを消尽し、五日に消えたという火事をいう。^(注2)朝顔の栽培に大空間は必要なく、この大火の後ぐらいから変化朝顔の栽培が盛んになったと理解すべきであろう。

喜多村筠庭『嬉遊笑覧』^(注3)は園芸の流行を記した中に次のように記す。

其後文化中、江戸より牽牛花はやりて、京・難波に及びり（これは下谷和泉橋通、御徒行町に谷七左衛門といふ大番与力あり。其人の老母、花を植作る事を好み、

〔中略〕其後朝貌を多く作り、さまざまの花出さしかば、この度は六枚折の屏風を葎簀にて作り、細き青竹の節ある、処々に花を挿むやうに、口を切て水を入れる。是も花を一つ、蔓の先少許添、葉を一枚それに活け、是を屏風にかけ并べて、屏風豊まる、様に作る。縁を高くす。また人の望に任せて借して見せしむ。文化五、六年の事なりき。一とせ谷氏大坂に在番して、彼地へ多く牽牛子を送りたり。彼処にも此花はやり小歌に作り、又絵入よみ本出来、これを芝居狂言にするに至れり。)

文化五、六年の頃、下谷和泉橋付近に居住する谷七左衛門が朝顔を多く栽培し評判になっていたとある。さらに七左衛門は大坂に番中にも朝顔を流行らせたという。身分は大番与力とあるので、お目見え以下の御家人であろう。筠庭は同様の記述を『き、のまにまに』文化十二年の項で行い、それを承けて岩本活東子写『武江年表補正』文化十二年の項にも同様の記述がある。

大坂では文化十二年二月に峰岸正吉著、丹羽桃溪・三木探月斎画『朝鮮珍花彙集』（浅田清兵衛板）^(注4)、七月には同書を改竄改題した『牽牛品類図考』（燕居堂蔵版）がそれぞれ色摺絵本として刊行されている。さらに同七月には壺天堂主人著、森春溪画『花壇朝顔通』（高橋平助他刊）と

いう色摺絵本が刊行されている。

文化十年七月十一日付石井夏海宛曲亭馬琴書簡^(注7)には

やへの朝貌いかゞ、よろしき花二出来候哉。承り度候。

と記し、新潟でも変化朝顔の流行が見られたことが知られる。後年の記録ではあるが、馬琴自身も文政十年三月十六日の日記に次のように記す。

朝飯後、予、朝がほたね并二なでしこたね・そてつ菜等、蒔之。朝がほハ池のふち、并やまぶふきのまへ、菜園北の垣際等也。

そして同年年六月四日の条には次のようにある。

当春予たねまき候朝がほ、今朝より花ひらく。但し、るり八重・同茶台等也。

文政十二年四月三日の条には十六種の朝顔の種を蒔いたこと、七月十一日の条には花が咲き揃い採種の準備をしたことが見える。^(注8)馬琴の日記は失われている年が多いので、記録として残らないだけで、馬琴も変化朝顔の流行とは無関係には居られなかったのであろう。

曲亭馬琴編『兔園小説』第五集には湯島手代町に住む岡田弥八郎の娘が十四歳でなくなり、文化十二年に娘の手文庫から出た種を蒔くと文化十三年に咲いたという奇譚を文宝堂が記録している。^(注9)少女までが変化朝顔に夢中になっていたのである。

そのような変化朝顔の流行の中で企画されたのが、秋水茶寮による朝顔花合であった。この朝顔花合について文化十四年に刊行された四時庵形影編『あさかお叢』(大羽屋弥七板)^(注10)は序文の中で次のように記す。

今たひ朝貌は一朝の盛りをえて津の国難波の富家饒民貴となく賤となく、僧となく俗となく、これをもてあそひて、すまひになすらへ、浪華のよしと、ひあし、と定めて、勝負をあらそふ事、こゝに三年はかり也けり、さるを東都にはこれを市に鬻ぐ者、あるは独り種をうゑて、ひとり楽しむ家はおほけれど、さなから流行としも聞へされは、是か好士も時にあはさる事久し、爰には去年の秋や、行はれつ、通して尊卑のもてあそひとなれることは、此秋を初めにして、文中の九日は、浅草牛頭天王の別当、大円精舎に、この花すまひをそ催しける

「文月 中の九日」とあるので七月十九日に、「浅草牛頭天王の別当 大円精舎に」とあるので大円寺でこの催しが実施されたことが知られる。文化十四年に刊行された高田与清『擁書漫筆』(伊勢屋忠右衛門板)巻四にも次のように記される。

このひと、せふたとせがほとは。牽牛花合といふことのおこなはれて。京江戸大坂のすき人たち、きほひて

奇品をあなぐりもとむることおほかたならず。今茲七月十九日。浅草御蔵前天王町天王社別当大円寺の牽牛花合。同月廿六日。上野不忍池弁財天社の茶屋の牽牛花合。などきこゆ。とて牽牛花をうゑおほするゆゑよし。または花のさまくの品図どもは。谷崎永律勾当があさがほ記。峰岸正吉が牽牛品類図考。などにくはしくしるしたれば闕てしるべし。

この二つの記事から、この七月十九日の朝顔花合が江戸における変化朝顔の流行の一つの劃期となり、同月二十六日にも上野弁財天の茶屋で第二回目の朝顔花合が開催されるなど、大きな影響を与えたことが知られる。

主催者の秋水茶寮は文政元年四月に『朝顔譜』を発行するが、文化十四年秋に自ら附言を記し、大円寺における朝顔花合わせの模様を伝えている。

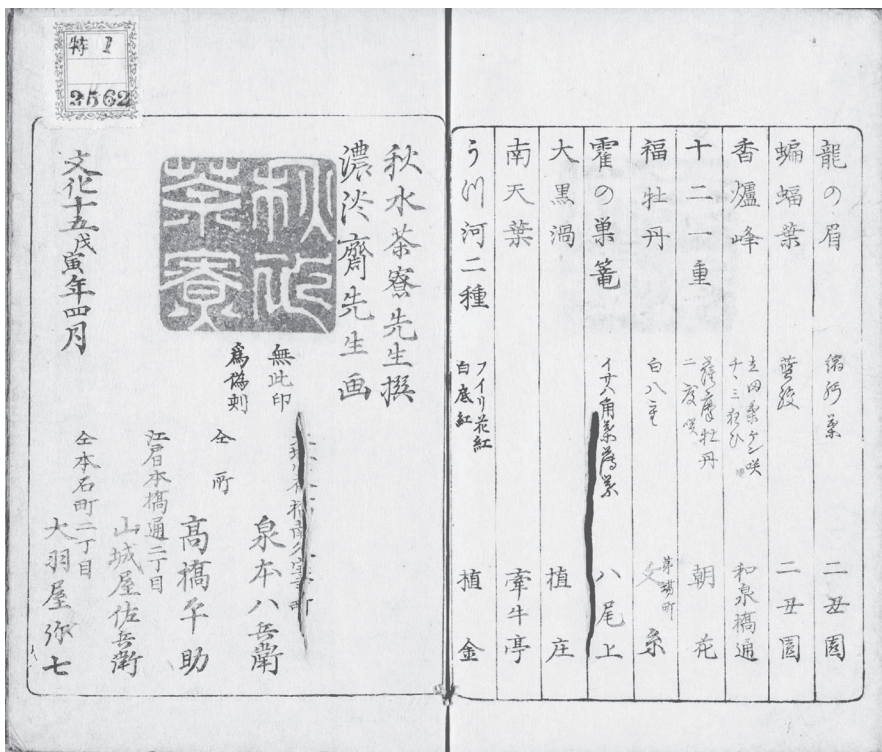
予始て去年の秋 浅草牛頭天王別当所大円精舎にして 朝顔合を催し 四方よりもて来し花に 左と右とを分ち 花の殊にうるはしきを 一の位に定め 是か等を七ツに分ちぬ しかせしより朝貌の花合てふものにてき この秋も 予か催せし浅草寺境内梅園精舎の花合を始とし 二たひ三たひ花合有き そか中にあやしく妙なるものを 友人濃淡斎の筆を借りもて写し置しを 書肆切に梓にのほせん事を乞求めぬ こや一

時の戯れ事を梓にちりはめむは おこのわさなれと
また見さらん人の談柄ともならば 花の面目ならん
と 花合にもれたるも めつらなるは書あつめて
五十種に及ひぬれば まつ書肆にあたへぬ 草稿のい
てきぬもあまたあれは 猶後編にのすへし

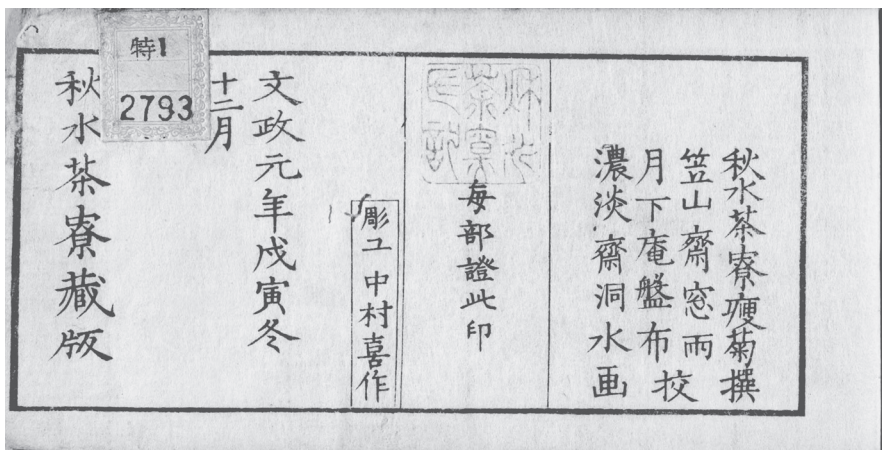
この記事から朝顔を七つの等級に分け、品評したことが窺えるが、その実態は不明である。ただ変化を楽しむ朝顔から、朝顔の位付けが始まったことにより、朝顔の觀賞に新たな要素が加わったことは否めない。

そして文化十四年秋にも浅草寺内にあった「梅園精舎」こと梅園院で、秋水茶寮としては二回目になる朝顔花合を催している。他にも二、三の朝顔花合があったという。江戸における朝顔の優品五十種を集めて刊行されたのが『朝顔譜』である。但し同書にも朝顔花合わせの位付けは反映されていない。

『朝顔譜』の刊記【図版4】には大坂日本橋南久宝寺町泉本八兵衛、同所 高橋平助、江戸日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛、同本石町二丁目 大羽屋弥七という四軒の板元が並ぶ。刊記には「秋水茶寮」という朱印が押され、「無此印為偽刻」と摺られているので、実際は秋水茶葉の私家版と考えられる。大羽屋弥七の活動は本書から文政二年までであり、素人同然の板元と考えられるので、実際の製作に



図版4 『朝顔譜』刊記 (国立国会図書館蔵)



図版5 『牽牛花水鏡』 (国立国会図書館蔵)

当たった板元であったと思われる。『花壇朝顔通』の刊記にも名を連ねる山城屋佐兵衛は江戸市中や上方との流通を担当したのであろう。大羽屋弥七と山城屋佐兵衛という板元の組み合わせは『あさかほ叢』の板元でもある。同書も四時庵形影の私家版同然の出版であったと考えられる。文政元年十二月に刊行された秋水茶寮『牽牛花水鏡』の刊記【図版5】には「秋水茶寮蔵版」と記され、板元名は見られず、「秋水茶寮之記」の朱印が押され、その下に「每部証此印」と摺られているので、秋水茶寮の私家版である。

また『あさかほ叢』は色摺絵本として刊行されたのに対し、『朝顔譜』は薄墨による彩色のみで刊行されている。『牽牛花水鏡』は墨のみの単色版である。江戸において色摺絵本は文化元年五月の禁令で出版できなかった。『あさかほ叢』は自序に「色をことにするものは筆をもていはしむ」とあることから、当初は墨摺絵本として刊行される予定であったと思われる。しかし文化末年は葛飾北斎の色摺絵本『隅田川兩岸一覽』の刊行に見られるように、一時的に禁令が緩和された時期で、このような色摺絵本の刊行が可能になったのであろう。『朝顔譜』はまた禁令が強まり、彩色摺が不可能となった時期に刊行されたと考えられる。出版業者にとって、朝顔の絵本は商材として可能性を見いだしていたものの、禁令その他の関係や購買層の問題からや

がて見切らざるを得ないジャンルであったと思われる。そのためこれ以降の朝顔絵本は私家版の形で刊行される。

秋水茶寮は『牽牛花水鏡』伊沢蘭軒序文により与住氏であることが知られ、『朝顔譜』附言には「卯花老漁瘦菊採筆於秋水茶寮」、「牽牛花水鏡」凡例には「荏土あさくさのくすし秋水老人誌」、同書刊記には「秋水茶寮瘦菊」と記しているのが、卯花老漁、瘦菊と名乗っていたことが知られる。職業は医師であった。平野恵は岡不崩『あさかほ』流行史(上)〔本草〕二二三号、一九三四年)から、秋水茶寮が土浦の人で江戸浅草天王寺横町に住み、内科を業とし、順庵と号したとする。その後の秋水茶寮の活動について国立歴史民俗博物館編『伝統の朝顔 Ⅲ』^(註1)には、文政元年七月八日「朝顔花合位附(雑花園文庫蔵)に出品者として「三保の浦」を初めとして十七点を出品し、文政八年七月二十一日に開催された「朝顔花合」(雑花園文庫蔵)の番付に選者として名を連ねていることが図版と共に紹介されている。

伊沢蘭軒や大田南畝、曲亭馬琴らに序文などを依頼し、『朝顔譜』『牽牛花水鏡』などを私家版として刊行できるだけの資力があつた人物が、変化を楽しむ朝顔を朝顔合という遊びにまで昇華させていったのである。その始まりを示すものがここに紹介する「朝顔花合」であった。

二 「朝顔花合」書肆と翻刻

候間当日被仰合未明より御光駕奉希候

【書誌】

この資料は「江戸末明治初年料亭他各種商売挨拶状引札等」とインクで書かれた題簽を有する、昭和期に製作されたと思われる貼込帖の中の三枚の木版摺である。

本紙とともに封筒が表裏に分断されて張り込まれている。

大きさは次の通り。

本紙 縦十六・六糎×横二十二・〇糎

封筒表 縦十五・六糎×横八・五糎

封筒裏 縦十六・四糎×横七・四糎

封筒表には左側に糊代が一糎分張り込まれているので、本来の封筒の幅は七・四糎であろう。また封筒裏「吉兵衛」の上に縦三・四糎、横一糎の紙が貼られているが、これは封筒表上部の欠損部分に相当するものと思われる。

【翻刻】

① 封筒表

七月十九日晴雨^ニ拘らず

奇品
百珍
朝顔花合

於浅草みくら前天王町牛頭天王別当大円寺開筵仕

② 封筒裏

下谷二丁目 小山歌文

同和泉橋通 植木屋佐助

同二丁目 同 孫七

執事 同 金兵衛

同 甚兵衛

同 吉兵衛

③ 本紙

朝顔の花合

浅草御藏前天王町牛頭天王別当所大円寺において開筵

朝かほの花の事いとふるくより歌にもよめり 万葉集山上
憶良が秋七草によみたるは いかなる花をさしていひけん
むかしは定かならざりけるにや 木槿^{ムツゲ}はさらなり 桔梗^{キチカウ}
さへあさかほのはなといへり 思ふに今の朝かほは陶隱居
が本草にしかくくと注したる牽牛花のことにして 古今集
物の名の部に猶けにごしとよみたれども 和名鈔の和訓に
よりて 今あさかほといふときは牽牛花ならずといふもの
なし おのれ此くさの花をめづること年あまたになりつ

春毎に種をふせては あしたに土かひ ゆふべに水そぎ
養ひたつる 秋毎に花のくさぐさあまたになりて 九色百
珍今さらにかゝなるふるにいとまなし 教寄の人々聞もて
伝へ 異なる花をもて来る、是彼あはして遊ぶもあり
或は乞とり携かへりて家裏とするさへあれども うときか
たにはいまだしられず よりてこの秋この月十九日 右に
載たる精舎にて この花あはせといふことをす こは只親
き疎きをいはず 人に見すべき為にしあれば あはする花
をもたずとも しの、めの比よりして こゝにつどひて遊
び給へ 抑この花の栄たる はづかに日影まつほどなれど
も 朝なぐに咲かえてさかり久しと歌にもよめり もし
遠きさかひにて見まほしといふ人もあらは 郵夫ウヂヤトにあつら
へておくりもやるべく思ふよし これらのよしを朝かほの
つほみに似たる禿筆ケヒもてくまなくも告侍るになん

文化丙子肇秋 荏土

秋水茶寮述

蓑笠隠居代撰

【補注】

小山歌文は『朝顔譜』に「小山」として二点出品してい
る人物と同一人であろう。

植木屋孫七、植木屋金兵衛、植木屋甚兵衛、植木屋吉兵
衛は文化十四年六月二十三日に開催された「槿花合」の番

付（『伝統の朝顔Ⅲ』所収、国立歴史民俗博物館）に「会
主」として見える人物と同一人か。『朝顔譜』に見える「植
金」「植吉」、「朝顔花合位附」に見える「植甚」「植金」も
同一人物と思われる。下谷の植木屋が中心となつて文化
十三年の朝顔花合を支えていたことが知られる。

曲亭馬琴が執筆した本文は術学的な文章となつている。
万葉集 卷八 一五三七・八番の次の歌を引く。

山上臣憶良の秋野の花を詠む歌二首

秋の野に 咲きたる花を 指折り かき数ふれば 七
種の花

萩の花 尾花葛花 なでしこが花 をみなへし また
藤袴 朝顔が花

「陶隠居が本草」とは隠居後に華陽隠居と号した陶弘景
の『本草経集注』をいい、「和名鈔」は『和名類聚抄』の
こと、さらに『古今和歌集』巻第十「物名」四四四番歌に
見える

牽牛子

打ちつけに濃しとや花の色を見むをくしらつゆの染む
る許を

を引いている。馬琴は自ら朝顔を栽培していたばかりか、
文化六年に「松染情史秋七草」（歌川豊広画、河内屋太助板）
を刊行していることもあり、秋の七草の一つでもあった朝

顔には関心があったのであろう。

注

(注1) 小笠原左衛門尉亮軒『江戸の花競べ 園芸文化の到来』

(青幻社、二〇〇八年)

(注2) 小鯖英一『江戸火災史』(東京法令出版、一九七五年)

(注3) 『嬉遊笑覧(五)』(岩波書店、二〇〇九年)

(注4) 平野恵は『十九世紀日本の園芸文化―江戸と東京、植木屋の周辺―』において谷七左衛門と大田南畝との朝顔を通じた交流を指摘する。嘉永六年刊「改正下谷上野辺

図」(近江屋吾平板)の三味線堀近くに見える「谷右京」はこの一族か。

(注5) 刊記には京・江戸の書肆名が入るべき所が空欄になっていて、大坂以外での販売が構想されていたことが知られる。

(注6) 磯野直秀「日本博物学史覚え書Ⅺ」(『慶應義塾大学日吉紀要 自然科学30』、二〇〇一年)にこの一件についての紹介がある。磯野は浅田清兵衛が共同出版を予定していた河内屋八兵衛、塩屋平助を出し抜いて単独板として刊行したことが訴訟原因とする。佐藤は『朝顔花壇通』の板元が、同書が朝顔絵本の株になることを阻止しようとしたのであろうと考える。これについては別稿を準備

している。

収

(注7) 『馬琴書簡集成』第一巻(八木書店、二〇〇二年)所

(注8) 『馬琴日記』第一巻、第二巻(中央公論社、二〇〇九年)

(注9) 文宝堂(亀屋久右衛門)は文政八年五月一日に海棠庵

(関思亮の家)においてこの話を披露している。日本随筆大成第二期第一巻(吉川弘文館、一九七三年)による。

(注10) 刊記には二編、三編の予告が記される。

(注11) 国立歴史民俗博物館振興会、二〇〇〇年

本稿は国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)(19KK0009))「ソウル大学校所蔵19世紀草双紙の研究―合巻を中心に―」による成果の一部である。

(ささこ) ささこる・実践女子大学教授